

上覧相撲の横綱土俵入りと行司の着用具

根間弘海

1. はじめに¹⁾

拙著『大相撲行司の伝統と変化』（2010）では上覧相撲（寛政3年6月）の行司に関し、大体、次のような結論を出している。

- (a) 木村庄之助（7代）は勸進相撲の場合と同様に、上覧相撲でも草履を履いていた²⁾。
- (b) 他の行司が足袋だったのか、素足だったのかは分からない。
- (c) 幕内土俵入りでは行司が先導したが、横綱土俵入りで先導していなかった。行司は土俵上で蹲踞し、横綱の土俵入りを待った。
- (d) 露払いと太刀持ちは横綱の土俵入りの間、土俵下で待機していた。太刀持ちは太刀を持っていなかった³⁾。
- (e) 土俵祭りでは追風を含め、脇行司が帯剣したかどうかは必ずしも定かでない。
- (f) 追風は土俵祭りと取組では服装が異なっていたが、他の行司は両方とも同じだった。
- (g) 『相撲隠雲解』（『VANVAN 相撲界』）の絵図には事実と違う点がいくつかある⁴⁾。

拙著の出版後もこれらの疑問点を解明していたが、確かな裏付けと共に解明できたものがいくつかある。それを本稿で提示しておきたい。本稿では、主として、次の点に焦点を絞っている。

- (a) 追風と行司はどんな装束をしていたか。
- (b) 行司は取組を裁くとき、帯剣していたか。土俵祭りではどうだったか。
- (c) 追風は草履を履いていたが、木村庄之助はどうだったか。
- (d) 行司は足袋を履いていたか、それとも素足だったか。
- (e) 十両・幕内土俵入りと同様に、行司は横綱土俵入りでも先導したか。
- (f) 太刀持ちは太刀を携帯していたか。
- (g) 一方の横綱が土俵入りをしている間、もう一方の横綱は土俵下で控えていたか。

そして、本稿の結論は、大体、次のようになる。

- (a) 追風の装束は土俵祭りと取組では異なっていたが、脇行司の装束は、他の行司と同様に、土俵祭りでも取組でも同じだった。
- (b) 土俵祭りでも取組でも追風と脇行司は共に帯剣していた。
- (c) 木村庄之助は天明8年以降、勸進相撲では草履を履いていたが、上覧相撲では履いていなかった。つまり、足袋も履かず、素足だった。草履を履いていたのは追風だけだった。
- (d) 他の行司も木村庄之助と同様に、すべて素足だった。足袋も履いていなかった。
- (e) 横綱土俵入りでも、十両土俵入りや幕内土俵入りと同様に、行司は先導していた。
- (f) 太刀持ちは太刀を持っていなかった。横綱土俵入りの間、露払いと太刀持ちは共に土俵上で控えていた。
- (g) 木村庄之助が土俵上で草履を許されたのは天明8年春場所である。
- (h) 寛延2年の行司免状にある草履は真実を反映していない。当時、木村庄之助は素足だったからである。寛延2年の免状の「上草履」は寛政以降の免状の文面をそのまま書き写したものである。

2. 行司の服装と帯剣

寛政3年の上覧相撲では、行司は場所入りや相撲場内で帯剣していた。これは、上覧相撲の様子を記述してある写本等で確認できる。

- (a) 『上覧の一式始末書』（常陸山著『相撲大鑑』（p.171））
「六月十一日暁六ツ時竹橋御門外御春屋にて惣年寄行司相撲人等残らず染帷子麻上下着用帯刀にて相揃い、御場所休息所溜りへ入り差控へ罷在候」
- (b) 『相撲一代記』（酒井著『日本相撲史（上）』（p.174））
「年寄は麻袴、行司は素袍、土烏帽子、木剣を帯して、それぞれ所定の位置についた」
- (c) 「上覧行事の式」（古河著『江戸時代の大相撲』（p.229））
「年寄36人染帷子麻上下着用にて土俵上へ代わる代わる相つめ、行司14人素袍にて侍烏帽子、木剣を帯し、追風を始めとし（後略）」

土俵祭りと取組では追風の服装と他の行司の服装は異なる。まず、土俵祭りの服装について見てみよう。

- (a) 『相撲上覧記』（『ちから草』（p.48））
「(前略) 追風烏帽子狩衣、沓を履きて出ぬ。脇行司木村庄太郎、太刀を持ち、随い出る。他に4人をじす。烏帽子素袍着て、みな木剣を帯す。」

(b) 『相撲私記』（『ちから草』（p.45））

「東の幄の屋より追風と名乗れる吉田善左衛門、団扇を取り、さとの行司木村庄之助、萩原幸吉、他に二人を召し具して、埒のうちを通りて来たれり。皆烏帽子、素袍を着たり。（追風は）細立烏帽子、狩衣、さしぬきを着る。追風素袍は略なり。」⁵⁾

それでは、取組の場合の服装はどうだっただろうか。追風の服装に関する記述をいくつか示す。

(a) 「上覧行事式」（『相撲隠雲解』（p.118））

「谷風、小野川取組の節、古例によって、往古、追風、禁裏より賜わりたる紫の打ち紐つけたる獅子王の団扇を持ち、風折り烏帽子、狩衣、四幅の袴着用の上、草履御免にて相勤め候」⁶⁾

(b) 『相撲私記』（『ちから草』（p.47））⁷⁾

「追風善左衛門、遠つ親の内裏より賜りし唐衣四幅の袴といえるものを着し、獅子王という団扇の世々伝えたるを持ち、（後略）」

(c) 『相撲一代記』（酒井著『日本相撲史（上）』（p.174））⁸⁾

「谷風、小野川の取組には、吉田追風がむかし禁裏より賜った紫の打紐のついた獅子王の団扇を持ち、風折烏帽子、狩衣、四幅の袴を着用し、土俵上で草履を履くことを許されてつとめた。」

追風以外の行司は、土俵祭りの脇行司を含め、取組では「烏帽子素袍」である。すなわち、脇行司の服装は土俵祭りでも取組でも同じである。

(a) 「上覧行事式」（『相撲隠雲解』（p.118））

「行司14人、素袍にて侍烏帽子、木剣を帯し、（後略）」

(b) 『相撲隠雲解』（p.106）

「行司は代わる代わる残らず侍烏帽子、素袍着用す。合せ行司は素袍の肩を絞り出る。」

上覧相撲の式については簡潔にまとめてある記述があるので、それを次に示す。

(a) 『武家将軍上覧式』（『ちから草』（p.13））

「1. 司行司 方屋祭、烏帽子素袍、太刀持せ、合せ服、唐衣、四幅袴、帯剣。太刀は行司、素袍にて持ち、沓は仕丁これを取る⁹⁾。

1. 脇行司 4人 烏帽子、素袍、合せの節は帯剣。

1. 合せ行司 無数 烏帽子素袍帯剣

1. 筆頭行司 2人¹⁰⁾ 烏帽子素袍無剣

1. 四本柱行司 4人 服同

- 1. 相撲結 2人 服同
- 1. 言上行司 2人 服同 』

(b) 『吹上御庭相撲上覧記』(『ちから草』(p.43))

- 「1. 御方屋祭之事 附御方屋開之事 素袍烏帽子着
- 1. 関相撲 一番
- 唐衣四幅袴着 吉田善左衛門
- 但関脇小結二番被仰付候者相勤申候¹¹⁾
- 右素袍烏帽子帯剣にて相勤申候 行司14人 』

追風が上覧相撲で着用した服装は、元龜年間に二条関白春良公から賜ったものと同じである。これは『吉田家由緒申立』(『ちから草』(p.10))に述べてある。

「元龜年中二条関白晴良公より日本相撲の作法二流なしとの御事にて一味清風と申御団扇並烏帽子狩衣唐衣四幅袴被下置候、(後略)」

この申立ては、寛政上覧相撲に際し、幕府へ提出した由緒申立書である。追風は上覧相撲の前後も同じ服装を授与されている。

(a) 『吉田氏先祖附(19代之分抜)』(『ちから草』(p.9))

「(寛政3年6月：NH) 今度公方様御相撲御用被仰付候二付、九曜御紋附帷子一重、同御上下一具、素袍烏帽子、四幅袴、唐衣、被下置候」

(b) 『公義御用勤之覚並御奉公覚書』(『ちから草』(p.5))

「素袍一具、素袍烏帽子一頭、紫紐、四幅袴、唐衣、唐団扇紐、拝領被仰付候事」

これは、『ちから草』の「吉田家略史」(p.127)でも確認できる。

(c) 「同(寛政：NH)3年6月11日、將軍家齊公吹上御殿において相撲上覧なり。これを勤む。幕府その勞を賞し白銀5枚を賜い、藩公もまた時服袴、素袍烏帽子、唐衣四幅袴を賞与せらる」

このように、寛政3年の上覧相撲では、行司は帯剣して取組を裁いていたことが資料で確認できた。相撲場の模様を記した写本では、帯刀に関する記述が少ないが。それは、帯剣が当時当然のことだったからかもしれない。

3. 絵図資料と帯剣の有無

土俵祭りを描いて絵図が2,3ある。どのように描かれているかを見てみよう。

(a) 『相撲隠雲解』の土俵祭りの絵図 (pp. 102-3/pp. 104-5)

- ・追風は帯剣していない。
- ・脇行司も帯剣していない。
- ・御徒はすべて帯剣している。
- ・行司は烏帽子を被っていない。

帯剣に関し、この絵図は事実を描いていない。というのは、写本では帯剣しているからである。『相撲隠雲解』の絵図に関しては、次の指摘もある。これは『ちから草』の樋渡著「再び相撲隠雲解を読んで」(p. 109)の中で述べてある。参考までに記しておく。

「惜しむらくは挿絵が当時の町絵師三代堤閑琳の筆であるために、余りに誇張が過ぎて真を採り得ない感じがします。せめてこれが写真を主とする浮世絵かまたは他の絵師なれば、今少し真実味を表しえたのではないかと残念に思われます。」

(b) 堺市博物館編『相撲の歴史』の絵図 (p. 39)

- ・土俵祭りで追風が帯剣しているかどうかは不明。追風の帯剣は剣の端っこが突き出ているようにも見えるが、そうでないかもしれない。
- ・他の脇行司は帯剣していない。
- ・行司は追風を含め、烏帽子を被っている。
- ・御徒はすべて帯剣している。

『相撲隠雲解』の2つの絵図 (pp. 102-5) と堺市博物館編『相撲の歴史』の絵図 (p. 39) では共に、御徒はすべて帯剣しているが、行司はそうでない。これは明らかな違いである。これらの絵図が真実を正しく描いていれば、土俵祭りでは行司は帯剣していなかったことになる。しかし、他の写本では追風を含め、脇行司も帯剣している。このように、絵図と写本では帯剣の有無に関し描写が一致しないが、本稿では写本が真実を述べているはずだと捉えている。

(c) 狩野養川の肉筆画、学研『大相撲』(pp. 67-8)

- ・谷風と小野川の取組図。土俵上の追風は、もちろん、帯剣している。
- ・土俵下で控えている行司もすべて帯剣している。
- ・手摺の近くに正座している親方たちは帯剣している。

この絵画は上覧相撲終了後に描かれたもので、絵師狩野に特別に依頼して描いたという記録がある。それは、『公義御用勤之覚並御奉公覚書 (19代吉田善左衛門)』(『ちから草』(p. 5))にある。

「今度公義御相撲之御絵図、狩野養川左ニ被仰付候ニ付、善左衛門行司之節、装束之様子得斗相分不申候由ニ而、養川左御門人徳山と申仁、度々、善左衛門御小屋へ罷越、諸事懸合御絵図出来候事」(p. 5)

絵師狩野は吉田善左衛門に確認しながら描いたという。つまり、この絵図は実際の相撲の場景を描いているに違いない。追風を含め、他の行司もすべて帯剣していたことをこの肉筆画は裏付けている。

4. 行司の足元

追風が草履を履いていたことは、次の資料で確認できる。

- (a) 『相撲一代記』(酒井著『日本相撲史(上)』(p.174))¹²⁾

「谷風、小野川の取組には、吉田追風がむかし禁裏より賜った紫の打紐のついた獅子王の団扇を持ち、風折烏帽子、狩衣、四幅の袴を着用し、土俵上で草履を履くことを許されてつとめた。」

- (b) 「上覧行事式」(『相撲隠雲解』(p.118))

「谷風、小野川取組の節、古例によって、往古、追風、禁裏より賜わりたる紫の打ち紐つけたる獅子王の団扇を持ち、風折り烏帽子、狩衣、四幅の袴着用の上、草履御免にて相勤め候」

このように、追風の草履は写本で確認できるが、他の行司の足元については必ずしも定かでない。木村庄之助の草履の有無をはじめ、他の行司が足袋だったのか、素足だったのか、写本では確認ができないのである。追風の草履は明確に述べてあるのに、木村庄之助の草履については何も述べていないことから、木村庄之助はやはり草履を履いていなかったようだ。当時の勸進相撲では草履をすでに履いていたことが確認できるので、上覧相撲ではそれを敢えて履かなかったかもしれない。絵図資料を見ると、他の行司と同様に、やはり素足である。

木村瀬平は『都』(M31.5.14)で次のように述べている。

「(寛政3年6月の上覧相撲では：NH)、行司は足袋以上の者に限り」

これに従えば、上覧相撲に参加した行司はすべて「足袋以上」である。しかし、たとえ勸進相撲に足袋を履いていたとしても、上覧相撲では敢えて履かなかったかもしれない。写本では、行司が足袋を履いていたことを確認できないからである。絵図で見る限り、行司はすべて素足である。

木村瀬平は足袋以上の行司が上覧相撲には参加したと語っているが、そもそもそれが真実だろうかという疑問がある。寛政3年当時、勸進相撲で上位行司は足袋を履いていただろうか。私はそれを調べてみたが、今のところ、それを確認できる文字資料は見えない。したがって、木村瀬平が「足袋以上の行司」という表現をしているが、それが正しいのかどうかは分からない。ただ、推測であるが、当時、上位行司は素足だったかもしれない。というのは、享和のころの絵図でも確認できるように、上位行司はまだ素足だった可能性があるからである。

- ・享和元年8月、「京都鴨川角觥図」(学研『大相撲』の口絵)

この絵図は、享和元年8月に京都二条で行われた江戸相撲の風景だという。行司の足は小指が明確に確認できるので、素足に違いない。相撲の場景を考慮すれば、地位は上位だったはずだ。享和元年には、行司はまだ足袋を履いていなかったかもしれない。この素足が正しければ、木村庄之助以外の行司が足袋を履くようになったのは、享和元年以降ということになる。文化6年には勘太夫改め式守伊之助が足袋を履いた錦絵があるので、行司が草履を履くようになったのは享和元年から文化6年の間あたりかもしれない¹³⁾。

5. 絵図資料と行司の足元

(a) 『相撲隠雲解』の土俵祭りの絵図 (p. 107/pp. 108-9)

- ・土俵祭りの追風の足元は明確でないが、たぶん素足である。
- ・脇行司の足元は明確でないが、たぶん素足である。
- ・横綱を案内している行司(たぶん木村庄之助)は明らかに素足である。
- ・横綱土俵入りの添え行司(たぶん木村庄之助)は明らかに素足である。
- ・取組を裁いている行司(たぶん追風)は明らかに素足である¹⁴⁾。

(b) 堺市博物館編『相撲の歴史』の絵図 (p. 39)

- ・土俵祭りの追風の足元は確認できないが、たぶん素足である¹⁵⁾。土俵に上がる前の「杓」は確認できない。
- ・脇行司は素足である。
- ・取組を裁いている行司の足元は不鮮明だが、たぶん素足である。
- ・弓取り式の行司(たぶん追風)は草履である。
- ・御徒はすべて帯剣している。

(c) 狩野の肉筆画、学研『大相撲』(pp. 67-8)

- ・谷風と小野川の取組を裁いている追風の足元は確認できないが、写本から草履を履いていた。
- ・土俵下で控えている行司の足元は不鮮明だが、たぶん素足である。
- ・年寄の足元も不鮮明である。

土俵周辺で多くの行司が正座しているが、足元の様子はなかなか確認できない。服装で足元をすっぽり隠してしまうからである、ほんの少し服装からはみ出ている場合もあるが、必ずしも肌の色だと断定できない。

このように、行司の履物に関しては、追風を除いて、明確な答えはないが、木村庄之助をはじめ、他の行司もすべて素足だったと判断してよいであろう¹⁶⁾。

6. 横綱土俵入り

土俵入りには幕内土俵入りと横綱土俵入りがあるが、前者については詳しい記述が写本にある。そのいくつかを示す。

- (a) 『すまみ御覧の記』（『ちから草』（p. 32）／『相撲私記』（『ちから草』（p. 44））¹⁷⁾

「東の方より行司導きに随い、若く勇める相撲ども21人、四本柱の内に入り、ひしひしとうずくまり拝し、立ち上がり、力足どうどうと踏みすえてかえり入る。西の方よりも同じ定めにしてかえり入ぬれば、東より又かわりかわりて出ず。西もまたしかり。三たびにあたる時は10人ずつ出ず。これを土俵入という。いずれも錦繡のたうさきかきたり。」

- (b) 『相撲隠雲解』の「上覧土俵の故実」

「行司先に立ちて、相撲人21人ほどずつ、段々に出て、礼儀を正し、土俵の上に平伏す。残らず揃い、行司合図いたすそのとき、一統土俵入り済み、また平伏す。1人ずつ囲いに入る。かくのごとく東西6度に済み、東西の関取、横綱を帯しめ、絵図の通り土俵入り済み、（後略）」

- (c) 『南撰要類集』の「角力式」（南町奉行所の部）

- ・最初、土俵に行司罷り出で、土俵に備え申す候神酒納め仕る。それより東の方より行司1人先立ち、角力取りども21人罷り出で、土俵入り仕り候。
- ・2つ目、土俵入り行司1人先立ち、相撲取りども21人罷り出で、土俵入り仕り候。
- ・3つ目、土俵入り行司1人先立ち、角力取りども10人罷り出で、土俵入り仕り候。

- (d) 『南撰要類集』の「土俵入之式」¹⁸⁾

- ・最初、東の方より行司1人先立ち、相撲取り21人、1人ずつ下座筵にて中礼致し段々に入り蹲踞す。揃いて一同立上がり拍子を取り下にいる。前方より1人ずつ拍子致し、元の手摺へ引取る。行司は後より立ち、下座筵にて中礼致し入る。
- ・次に、西の方より同様に21人、土俵入り致し候。
- ・次に、東より同様に21人。
- ・次に、西より同様に21人。
- ・次に、東より同様に10人。

このように、幕内土俵入りでは行司が先導し、御前掛りで土俵入りしている。それでは、横綱土俵入りの場合はどうであろうか。行司は先導していただろうか、それとも行司は土俵上で横綱の土俵入りを待っていただろうか。横綱が土俵入りをしている間、露払いと太刀持ちはどこにいたであろうか。太刀持ちは太刀を持っていただろうか。横綱の土俵入りについては、分かっていることとそうでないことがある。

横綱が一人ずつ土俵入りしたこと、露払いと太刀持ちは土俵下で待機していたことは、写本等で

分かっている。たとえば、それを裏付ける記述をいくつか見てみよう。

(a) 「寛政3年吹上御庭相撲上覧記」(『ちから草』(p.40))¹⁹⁾

「(前略) 東の大関小野川、禪の上に追風より許されたる七五三を張りて出で、一人立ちの土俵入りあり。東の方へ引取る。また西の大関谷風、小野川と同じ形にて一人立ちの土俵入りをして去る。この両関には角力兩人ずつ前後に随い、土俵入りの内、青竹手摺左右に控え、両関土俵入り済みて引くとき、また前後に随い引く」

横綱は前後に露払いと太刀持ちを従えて、一人ずつ土俵入りをしている。横綱が土俵入りをしている間、露払いと太刀持ちは土俵下で待機している。土俵入りが済んだら、来た時と同様に、露払いと太刀持ちを従えて退却している。小野川が土俵入りを済ませた後で、谷風は登場している。この記述では、横綱土俵入りで行司がどんな役割を果たしたかについては分からない。

(b) 『南撰要類集』の「角力式」(南町奉行所の部)

「4つ目、関1人上の上に横綱を締め、行司差添え土俵入り仕り候。
右、西の方も同様に御座候」

これによると、行司は「差添え」しているが、どういう差添えをしたかは必ずしもはっきりしない。「差添え」には、少なくとも二つのことが考えられる。一つは、現在と同様に、横綱を手摺通り(即ち花道)から先導することである。もう一つは、土俵上で横綱が土俵に登場するのを待つことである。どちらの場合も、行司は土俵上で横綱土俵入りを見守る。拙著『大相撲行司の伝統と変化』では、後者だったに違いないと述べているが、これはどうやら間違いだと最近分かった。というのは、次の資料で行司は横綱の先を歩いていることが確認できたからである。

(c) 『南撰要類集』の「土俵入之式」

- ・次に東より行司先立ち、関1人上の上へ横綱を締め、添え角力2人、1人は先立ち、1人は後より付添い罷り出で、中礼致す。添え角力は水手桶際筵に2人とも控え、関1人土俵入り致し入り候節は後より出で候。添え相撲先立ち、1人のものは後に付き、下座筵にて関1人中礼致し、行司もその後より引き申す候。
- ・次に、西より関1人、同様に土俵致し候。

この中に「東より行司先立ち」とはっきり書いてある。現在のように軍配を肩あたりに支えて先導しなかったかもしれないが、横綱の前を先導していたことは間違いない。『南撰要類集』の「角力式」で見た「差添え」は、どうやら、「先導すること」も意味していることになる。上覧相撲で行司が露払い・横綱・太刀持ちを先導していたことを確認できたのは、つい最近のことである。これは驚きと同時に、新発見だった。どの写本でもそれを確認できなかったし、絵図でもそれを描いてあるものはなかったからである。

小野川の土俵入りを済ませた後、行司はいったん土俵を退いている。ということは、木村庄之助が両横綱の土俵入りを引いたのであれば、手摺通りあたりで直ちに谷風の土俵入りも引いたことに

なる。別の行司が谷風の土俵入りを引いたという可能性もあるが、それを裏付ける資料はまだ見ていない。

太刀持ちの太刀に関しては、それを持っていたかどうかとなると、どうやら持っていなかったようだ。今のところ、太刀を持っていたことを裏付ける文字資料はまだ見ていない。しかし、次のような不可解な記述がある。

・『武家将軍上覧式』（『ちから草』（p.14）

「東の力者飾りを附し廻しを締め脇行司に誘導せられ方屋に入る。一同揃踏みをする。西もまた同じ。殊に優れたる力者あれば横綱を掛け、太刀を持たせ、1人踏みをなさしむべし」

これによれば、横綱は太刀を持ち、一人土俵入りをするになっている。横綱自身が太刀を持って土俵入りすることは無理があることから、土俵までは横綱が太刀を持ち、土俵入りをしている間は代わりの力士が持ったかもしれない。この「横綱に太刀を持たせ、1人踏みをなさしむべし」という表現をどう解釈すればよいのか分からないので、このような記述があることをここでは指摘するのに留めておきたい。

7. 横綱土俵入りと絵図

(a) 『相撲隠雲解』（pp.106～8）

- ・行司が横綱を案内しているが、先導しているかどうかは分からない。横綱が向かうべき方向を指し示しているだけかもしれない。『南撰要類集』に基づけば、先導していると解釈するのが自然であろう。
- ・横綱が土俵入りしている間、行司は土俵上にいる。
- ・露払いと太刀持ちは土俵下で控えている。
- ・太刀持ちは太刀を持っていない。

(b) 堺市博物館編『相撲の歴史』の絵図（p.39）

- ・横綱（谷風）一人が土俵上で土俵入りしている。土俵にいるのは谷風だけである²⁰⁾。
- ・行司は土俵上にいない。つまり、行司の差添えなしで、横綱は土俵入りしている。
- ・露払いと太刀持ちは土俵の下で中腰で待機している。
- ・太刀持ちは帯剣していない。
- ・土俵入りを済ませたはずの横綱（小野川）が露払いと太刀持ちと共に土俵下で谷風の横綱土俵入りを見ていることである。これは奇妙である。というのは、横綱土俵入りを済ませた小野川はすでに退場、土俵下にはいなかったはずだからである。もしこの絵図が真実を描いているとすれば、写本の記述が間違っていることになる。しかし、写本では行司が差し添えをし、小野川はすでに退場していることが確認できることから、この絵図は真実を正しく描いていないはずだ。なぜこのような描き方をしたのだろうか。実際の土俵入りの模様ではなく、二人の横綱土俵入りの様子をまとめて描いたのかもしれない。

絵図の描写と写本の記述には共通するものもあるし、違うものもある。共通しているのとしては、たとえば、次のようなものがある。

- (a) 露払いと太刀持ちが土俵下で待機している。
- (b) 太刀持ちが太刀を持っていない。
- (c) 行司は土俵上で差添えをしている。

異なるものとしては、たとえば、次のようなものがある。

- (a) 行司の先導が必ずしも明確でない。
- (b) 横綱土俵入りをしている間、行司がいない絵図もある。
- (c) 横綱が土俵入りをしている間、もう一人の横綱・露払い・太刀持ちが土俵下で待機している。

このような違いがあっても、『南撰要類集』にあるように、横綱土俵入りでは行司が先導していると判断してよいであろう。もし行司が先導していなかったならば、『南撰要類集』の記述が間違っていることを証明しなければならない。太刀持ちの太刀に関して、『南撰要類集』に何かヒントがないか調べてみたが、それについての記述を見つけることができなかった。

8. 太刀持ちの太刀

本稿では、太刀持ちは太刀を持っていなかったと判断しているが、これに関しては相撲の文献で意見が同じだというわけではない。三木・山田著『相撲大観』の「剣持と露佛」(pp. 354-5)の項では、太刀に関しては疑問視している²¹⁾。

「横綱力士の土俵入りに露払いと太刀持ち二人を前後に従えることは今も然るところなるが、露払い即ち前駆は谷風・小野川の時と同じく前に一人を進ましたれど、後ろなる一人が剣を持つことは誰より始まりしか詳らかならず。谷風・小野川の土俵入りにもただ前後に一人ずつに従えたのみにて太刀を持ちたるはなし。その図は『相撲隠雲解』にもあり、成島峰雄の『すまゐ御覧の記』にも『東の大関小野川たうさき(廻し：NH)の上に横綱というものをかけ云々、弟子のすまゐ二人前後にひきつれて練り出づ云々、立ち替わり西の大関谷風と云えるはこれも横綱をかけ、達ヶ関・秀の山といえる大いにたくまきものどもを二人したがえ出で云々』とありて、剣を持ちたることを記さず。將軍御覧の場なればとて剣を略したるにもあらざるようなり。然らば剣のことは両力士より後のことなるべし。このことはなお考えるべきだが、知る人あらばおしえられんことを請うなり」

これは、本稿と同じである。太刀持ちが太刀を持っていたとする文献もいくつかあるので、参考までに、三つ示しておきたい。

- (a) 『相撲道と吉田司家』(p. 50)。

「まわしの上に横綱というものをかけた東の大関小野川が剣持ちと露払いを前後にしたがえて堂々と姿を現す」

- (b) 酒井著『日本相撲史（上）』（p.174）。

『相撲一代記』を参照しながら、横綱は「太刀持ち」と「露払い」を従えて土俵入りをしたと書いてある。『相撲一代記』にこのような言葉遣いがあったかどうかは、まだ確認していない。もし「太刀持ち」や「露払い」という表現があったなら、横綱の後ろにいた力士は帯刀していたはずだ。

- (c) 『古今相撲大要』。

「横綱土俵入の節は露払いと称する者一人（横綱の：NH）前に立ち、太刀持一人後ろに従い出づ。寛政3年將軍家上覧の節、谷風の横綱土俵入には達ヶ関、秀ノ山（前頭、この兩名と谷風はいずれも伊勢ノ海弟子）がその二役を勤む」（p.7）

これらの文献が指摘しているように、太刀持ちが太刀を持っていたなら、本稿で述べてあることは修正しなければならない。また、上覧相撲を描いている絵図も間違っていたことを指摘しなければならない。どの絵図でも太刀持ちは太刀を持っていないからである。

9. 勸進相撲の土俵入り

寛政元年から寛政3年6月までの勸進相撲では横綱土俵入りがどうなっていたかを錦絵で見ていくことにする。寛政3年6月の上覧相撲の土俵入りと比較するためである。

- (a) 写本「横綱ノ図（谷風）」。寛政元年11月，春好画，池田編『相撲百年の歴史』（p.50）。

- ・谷風の土俵入りを描いてある図。太刀持ちの力士名は不明。
- ・谷風が土俵入りしている間，太刀持ちは土俵上で蹲踞している。
- ・谷風と太刀持ちだけが土俵上にいる。
- ・差添えの行司はいない。

- (b) 「横綱ノ図（小野川）」。寛政元年11月，春好画，池田編『相撲百年の歴史』（p.54）。

- ・小野川の土俵入りを描いてある図。太刀持ちは二本松である。
- ・小野川が土俵入りしている間，太刀持ちは土俵上で蹲踞している。
- ・小野川と太刀持ちだけが土俵上にいる
- ・差添えの行司はいない。

- (c) 「横綱土俵入りの図」，寛政3年春場所（4月）²²⁾，春英画。『国技相撲の歴史』（pp.128-9）。

- ・顔触れが画面に書いてあり，谷風は顔をこちら側に向いている。
- ・谷風が土俵入りしている間，小野川は土俵上で蹲踞している。
- ・太刀持ちは二人，土俵下で控えている。

- ・ 太刀持ちは二人とも太刀を持っている。
- ・ 露払いが描かれていない。

(d) 「日本一横綱土俵入り後正面之図」²³⁾、寛政3年春場所²⁴⁾、春英画、学研『大相撲』(p. 274)。

- ・ 顔触れが画面に書かれていない。谷風は背中をこちら側に向けている。
- ・ 谷風が土俵入りしている間、小野川は土俵上で蹲踞している。
- ・ 太刀持ちは土俵下で控えている。
- ・ 太刀持ちは太刀を持っている。
- ・ 露払いは確認できない。

これらの錦絵から分かるように、勸進相撲の横綱土俵入りを描いた錦絵でも太刀持ちは土俵下で控えているものもあれば、土俵上で蹲踞しているものもある。露払いも常に描かれているわけでもない。どの錦絵でも共通しているのは、太刀持ちはすべて太刀を持っていることである。いずれにしても、寛政3年6月頃までは、勸進相撲の横綱土俵入りでも太刀持ちと露払いは横綱と共に土俵上に必ずしも上がっていない。

それでは、いつ頃から横綱土俵入りでは、現在のように、太刀持ちと露払いが土俵上に上ったのだろうか。古河著『江戸時代の大相撲』(p. 255)にも同じ問いがある。

「横綱力士および太刀持ち、露払いの三人が土俵の上に立つようになったのは、江戸時代のいつごろか」

学研『大相撲』(274)には、それについて次のように述べている。

「不知火諾右衛門のころから、太刀持・露払も土俵上にのぼるようになった」

これが正しいのかどうかは、残念ながら、分からない。行司と直接関係ないので、私はあまり深く調べていない。

10. 勸進相撲の草履

勸進相撲で木村庄之助が草履を許されたのは、天明8年以降である。それ以前は草履を許されていないはずだ。寛政元年11月26日付で、寺社奉行御掛板倉左近将監様へ差し上げた一札があり、その中に「先年」という表現がある。

「 差上申一札之事

今般吉田善左衛門追風殿より東西之谷風・小野川へ横綱伝授被致度、先年木村庄之助、場所上草履相用候儀、先日吉田善左衛門殿より免許有之、その節場所にて披露仕候例も御座候に付き、この度も同様披露仕度旨、牧野備前守様へも御願申上候徒所、苦しかる間敷仰せ渡され、難有畏り奉り候。尤も横綱伝授の義は吉田善左衛門殿宅に於て免許致され候

儀に御座候。この段牧野備前守様へも御届申上候。これによって一札差上申候。以上。
寛政元酉年十一月二十六日

勸進元 浦風林右衛門
差添 伊勢の海村右衛門
木村庄之助煩に付代
音羽山峯右衛門

寺社

御奉行所様

」
『日本相撲史(上)』(p.166)／『角力新報(7)』(p.23))

これを裏付ける資料として錦絵がある。天明7年以前の錦絵では、木村庄之助は草履を履いていないが、天明8年以降の錦絵では草履を履いている。つまり、寛政元年の「先年」を境にして、木村庄之助は草履を許されているのである。たとえば、次の錦絵は天明7年以前に描かれているので、木村庄之助は草履を履いていない。

- (a) 「江都勸進大相撲浮絵之図」, 天明4年春場所, 春草画, 版元鶴屋, 『相撲浮世絵』／堺市博物館編『相撲の歴史』(p.36)。
- (b) 「日本一江都大相撲土俵入後正面之図」, 天明7年(1787), 春草画, 『江戸相撲錦絵』(p.7)。

しかし、天明8年以降に描かれた錦絵では、木村庄之助は草履を履いて描かれている。

- (a) 「土俵入り」, 天明8年春場所, 春好画, 池田編『相撲百年の歴史』(p.10)。
- (b) 小野川と龍門の取組。寛政2年3月, 春好画, SWPM (p.89)。
- (c) 小野川と雷電の取組。寛政2年11月, 春好画, 石黒著『相撲錦絵発見記』(p.84)。
- (d) 雷電と陣幕の取組, 寛政3年, 春英画, 『相撲浮世絵』(p.70)。
- (e) 小野川・谷風の引分けの図, 春英画, 寛政3年4月, SWPM (p.24)。

寛政3年6月の上覧相撲が行われた頃、勸進相撲では木村庄之助が草履を履くのは当たり前になっていた。そのような背景があったため、上覧相撲でも木村庄之助が草履を履いていても不自然でないはずだが、実際は、履いていなかったようだ。写本でも草履を履いていたことを確認できないし、絵図でも木村庄之助は他の行司と同様に素足である。やはり上覧相撲は特別な催しであるため、相撲協会が草履を遠慮したかもしれないし、奉行所から許されなかったかもしれない。追風は草履を履いていたので、追風が木村庄之助に遠慮するように働きかけたはずはない。

天明8年に木村庄之助が草履を許されたとすれば、寛延2年に5代木村庄之助に授与された行司免状はどう解釈すればよいだろうか。

「 免許状
無事之唐団扇並紅緒, 方屋之内, 上草履之事免之候, 可有受用候, 仍免状如件

寛延二年巳八月

本朝相撲司御行司
19代吉田追風 ㊦

江府

木村庄之助殿

」

この免状には「上草履之事免之事」という表現がある。これは事実を正しく反映しているだろうか。実は、そうでないのである。というのは、寛延2年の頃は、木村庄之助は草履を履いていなかったからである。それでは、なぜそのようなミスが生じたのだろうか。それは、文政10年に8代木村庄之助に授与された免状の文面をそのまま利用したからである²⁵⁾。つまり、この免状の文面は寛延2年に作成されたものではなく、後の時代に作成されたものである。

11. おわりに

寛政3年6月の上覧相撲を記した写本はたくさんありながら、焦点の当て方に依っては意外と分からないことがいくつかある。たとえば、次のようなことは必ずしも明確になっているとは限らない。

- (a) 木村庄之助が草履を履いていたか。
- (b) 行司はすべて素足だったか。
- (c) 太刀持ちは太刀を持っていたか。
- (d) 横綱土俵入りを行司が先導したか。
- (e) 上覧相撲に参加した行司たちの房の色は何だったか。

本稿では、そのいくつかについて写本や絵図を活用しながら、一定の結論を出している。しかし、その結論がすべて正しいのかとなると、必ずしもそうだとは言えない。というのは、写本に述べてないものもあるし、絵図で確認できないものもあるからである。特に絵図の場合、描かれているものが真実だとは限らない。写本と一致すれば、真実に近いと判断してよいはずだ。しかし、写本の記述と一致しない場合はどうだろうか。どちらが正しいかを吟味しなければならない。吟味しても結論が簡単に得られない場合もある。そのような問題があることは承知の上で、本稿では一定の結論を出している。

実は、本稿で触れたくても触れられなかった問題が一つある。それを簡単に記しておきたい。木村庄之助はなぜ草履を履かなかったのだろうか。その理由が知りたかったが、調べた文献ではそれを見つけないことができなかった。当時の勧進相撲では木村庄之助は草履を履いていたのである。それにもかかわらず、上覧相撲では履いていない。上覧相撲という特別の催し物であるために履かなかったはずだと推測できるが、その推測が必ずしも正しいとはかぎらない。他に理由があるかもしれないのである。当時の資料で何か理由が記されていないかと注意して調べてみたが、残念ながら、まだ幸運に恵まれていない。

<注>

- 1) 上覧相撲に関しては相撲趣味の会の野中孝一氏と何度か意見をメールで交換し合い、貴重なご意見を頂戴した。ここに改めて感謝申し上げたい。野中氏も、いずれ、上覧相撲に関し論考を発表すると語っているので、その論考で拙著との違いは確認することもできよう。
- 2) 木村庄之助（7代）は明和8年3月から寛政11年11月まで務めている。
- 3) 寛政の頃、現在と同様に、横綱の後ろにいた力士を「太刀持ち」、前にいた力士を「露払い」と言っていたかどうかは定かでない。本稿では、現在と同様に、便宜的に前者を「太刀持ち」、後者を「露払い」と呼ぶことにする。
- 4) 本稿の『相撲隠雲解』は基本的に『VANVAN 相撲界』に基づく。絵図では事実と違う点があるが、草履に関する限り、絵図の方が事実を正しく反映していることが分かった。木村庄之助は草履を履いていなかったからである。
- 5) 『すまゐ御覧の記』（『ちから草』（p.31））ではとよく似ているが、「さとの」が「さての」になり、「萩原幸吉」が「吉田幸吉」になっている。
- 6) 追風の軍配房は「紫」である。
- 7) 同じ表現は、たとえば、『すまゐ御覧の記』（『ちから草』（p.31））でも見られる。
- 8) これと類似の記述は式守蝸牛著『相撲隠雲解』にも見られるが、もちろん、他の写本等でも見られる。
- 9) 追風に代わって行司が太刀を持つような表現になっているが、実際はどうだったのかははっきりしない。いずれにしても、追風も行司も土俵祭りでは帯剣していた。
- 10) この筆頭行司がどんな役割を果たしていたのかは定かでない。
- 11) 『ちから草』（p.43）では「但」が「組」となっているが、『相撲講本』（p.633）にあるように、やはり「但」が正しいはずだ。
- 12) これと類似の記述は『相撲隠雲解』にも見られるが、もちろん、他の写本等でも見られる。
- 13) 上位行司が足袋を履くようになったのは、少なくとも寛政年間を過ぎてからだと推測しているが、これは間違っているかもしれない。足袋をいつから履き始めたかに関しては非常に興味あり、調べているのだが、これといった確証がまだ得られない。文字資料で確証が得られなくても、錦絵で得られるはずだと思っていたが、実際はそれもうまくいかない。寛政から文化あたりまでの錦絵では、木村庄之助以外の行司はほとんど描かれていないからである。しかし、文字資料であれ絵図資料であれ、注意深く調べていけば、足袋を履き始めて年月は分かるはずだ。そのように楽観視している。
- 14) この行司は草履を履いていないので、追風ではないはずだ。追風が草履を履いていたことは写本で明らかだからである。もしかすると、木村庄之助かもしれない。この絵図は谷風と小野川の取組を描いたものだと思っていたが、どうやらそうではないらしい。いずれにしても、裁いている行司は素足である。
- 15) 追風は土俵に上がる前は沓を履いていたが、土俵上では素足だった。
- 16) 拙著『大相撲行司の伝統と変化』では木村庄之助は草履を履いていたはずだと述べているが、これは間違っていたことになる。天明8年以降、木村庄之助は草履を許されていたので、上覧相撲でも履いていたはずだと推測したが、「上覧相撲」ということで履かなかったようだ。それが自発的な遠慮だったのか、奉行所から許しが出なかったのかは分からない。追風は草履を履いていたのだから、木村庄之助の草履も許されてよいはずだが、当時はそう簡単に割り切れないものがあつたようだ。
- 17) 『すまゐ御覧の記』（p.32）と『相撲私記』（p.44）では細かい表現が違うが、ほとんど同じ記述だと判断してよい。
- 18) 同じような記述は『南撰要類集』の「土俵式」の項でも見られる。
- 19) これは、たとえば古河著『江戸時代の大相撲』（pp.234-5）でも見られる。
- 20) 学研『大相撲』（p.152）のキャプションによると、土俵入りしているのは谷風で、控えている横綱は小野川である。写本等によると、小野川が先に土俵入りをしているので、小野川はすでに土俵入りを済ませたことになる。
- 21) この引用でも、語句を少し変えている。
- 22) この錦絵は、池田編『相撲百年の歴史』（p.5）では寛政元年11月となっているが、顔触れは寛政3年春場所と一致する。
- 23) この「日本一横綱土俵入後正面之図」は直前の「横綱土俵入りの図」と構図がよく似ているが、別々の錦絵である。

24) この錦絵の年月は定かでないが、おそらく寛政3年春場所であろう。

25) 寛延2年に行司免状の「草履」がミスであることは、拙著『大相撲行司の伝統と変化』の中でも言及している。

参考文献

相撲関連の雑誌（『相撲』、『大相撲』、『野球界』、『角力新報』、『角力雑誌』、『角力世界』、『武侠世界』等）や新聞等も参考にしたが、基本的に雑誌や新聞等は省略してある。

荒木精之，昭和34年，『相撲道と吉田司家』，相撲司会。

池田雅雄，1977，『相撲の歴史』，平凡社。

『大相撲』，昭和52年，学習研究社。

岡敬孝，明治18年，『古今相撲大要』，報行社。

風見明，2002，『相撲，国技となる』，大修館書店。

川崎房五郎，昭和59年11月，「寛政3年の上覧相撲」『選挙』，pp.27-331。

『国技相撲の歴史』（昭和52年10月別冊『相撲』秋季号），ベースボール・マガジン社。

酒井忠正，昭和31年／39年，『日本相撲史』（上・中），ベースボール・マガジン社。

式守蝸牛，寛政5年，『相撲隠雲解』／『VANVAN 相撲界』（秋期号）に収録，1983。

『写真図説相撲百年の歴史』，池田雅雄編，昭和45年，講談社。

『相撲浮世絵』，別冊『相撲』夏季号，昭和56年6月，ベースボール・マガジン社。

『相撲大事典』，金指基，2002，現代書館。

『相撲の歴史一堺・相撲展記念図録一』，堺市博物館制作，1998年3月，境・相撲展実行委員会。

『南撰要類集（南町奉行部）』，東京都公文書館所蔵。

根間弘海，1998，『ここまで知って大相撲通』，グラフ社。

根間弘海，2005，「土俵入の太刀持ちと行司」『専修経営学論集』第80号，pp.169-3203。

根間弘海，2006，『大相撲と歩んだ行司人生51年』（33代木村庄之助と共著），英宝社。

根間弘海，2009，「行司の帯刀」『専修人文論集』第84号，pp.283-313。

根間弘海，2010，『大相撲行司の伝統と変化』，専修大学出版局。

根間弘海，2010，「立行司も明治11年には帯刀しなかった」『専修人文論集』第87号，pp.199-234。

常陸山谷右衛門，昭和60年，『相撲大鑑』（復刻版），ベースボール・マガジン社。

武技部17-20，『古事類苑』所収，昭和35年，吉川弘文館。

古河三樹，昭和17年，『江戸時代の大相撲』，国民体力協会。

古河三樹，昭和43年，『江戸時代大相撲』（復刻版），雄山閣。

山田伊之助編，明治34年，『相撲大全』，服部書店。

栢岡智・花坂吉兵衛，昭和10年，『相撲講本』，相撲講本刊行会／昭和53年，復刻版，誠信出版社。

三木愛花・山田春塘，明治35年，『相撲大観』，博文館。

吉田追風，昭和42年，『ちから草』，吉田司家。（この中に，「すまい御覧の記」，『吹上御庭相撲上覧記』，『相撲上覧記』，『相撲私記』などの抜粋がある。）